

〈私の研究〉

助詞から助詞へ

森野 崇

「私の研究」。私にとってはいささか恥ずかしく、また重いタイトルである。「あなたの好きなサッカーについての話でも、競馬についての話でもかまいませんよ」と、執筆依頼をいただいた折に言われたのだが、もちろんそれは編集委員長のご冗談で、念のためにこれまでのこのコーナーを読み返してみると、そんな〈私の道楽〉とでも名付けた方がよい内容のお話は一つも見あたらない。気が進まないが、私のこれまでの「研究」や、今格闘していることなどについて、少々書いてみることにする。

私は大学で「国語学」の講義や演習を担当しながら、日本語についていろいろと考えているのだが、もともと格別国語学が好きだったわけではない。大学三年のときに国語学のゼミを選んだ理由も、「国語学ならばどの時代のどの作品でも対象にできるのではないか、それに特定の作品でなく現象そのものが対象でもよさそうだし、自由度が高いのではないか」という、あまり感心できないものだった。前期のゼミは、日本語を論じた近代の文献について、受講生が担当箇所を検討し報告するという、オーソドックスな形で進められた。実は、そちらの内容はあまり覚えていない。後期は、学生がテキス

トを選んでよいとのことで、日本語文法に関する様々なテーマをおもしろく扱っていて当時話題だった、井上ひさしの『私家版日本語文法』の中から、各自が興味のある章をとりあげ発表する形で、ゼミが進められることになった。こちらは毎回楽しかった。私は「ガとハの戦い」と題された一章を選び、いくつかの文法書を読んで準備した。それまで文法イコール暗記という固定観念で、「私は学生です」と「私が学生です」の違いなど考えたこともなく、「私は……」と言うのだから「は」も主語を示す格助詞だろうとぼんやり思っていた、全く勉強不足だった私には、「誰が来た？」は言えるが「誰は来た？」は言えないといった文法現象の背後にある理由や原因を探っていく研究書は、大変刺激的だった。

結局、私は学部の卒業論文でも「は」を扱った。漠然と格助詞だと思っていた助詞が係助詞だったこと（本当は高等学校の古典語文法の教科書にも書かれていたのだが）を知り、「息子が生まれたとき、ちょうど一杯やっていました」を「息子は生まれたとき、ちょうど一杯やっていました」としただけで、おかしな内容の文になってしまうといったことに関わる性質や、「日本はいいチームである」「日本はいいチームではある」としたときに生じる微妙なニュアンスに関わる性質など、「は」のいろいろな面に対して、強い関心を抱くようになっていた。要するに、「はまってしまった」のである。ただ、既におびただしい数の論考がある現代語の「は」ではなく、比較的手薄だった古い時代の「は」を調べることにした。対象にしたのは、『万葉集』の「は」である。「は」は、歴史的に見てもあまり大きな変化を遂げてはおらず、現代語同様に考えられる例も

少なくないが、それでも、原文の「は」が現代語訳でそのまま「は」になっていない例も、時折見受けられた。例えば、

咲く花はうつろふときありあしひきの山菅の根し長くはありけり

の「長くは」の「は」は、「山菅の根こそ長く保つものであった」などと、注釈書ではまず消えた形で現代語訳されている。現代語で「長くはある」などとすると、どうしても限定・対比のニュアンスが生じてしまう。ここは「美しく咲く花には散りすぎていくときがある。では、いったい何が長くあるものなのか」という文脈での使用例で、「長くはあるが……」といった対比の意図が認めにくいため、そのような意を生じさせる原文の「は」が消えた訳になるのである。古い「は」は、現在私たちの使っている「は」と全く同じはたらしきものではないのである。卒業論文では、このような「は」の機能をできるだけ整理しようとしたのだが、当然思うようにはできなかった。

その後進学した大学院でのテーマは、既に卒業論文作成の最中に決まっていた。平安時代の「は」の機能の検討である。同時に、「ぞ」「なむ」「こそ」といった、他の係助詞も考えることにした。「は」だけを見たのでは、そのはたらしきに迫りきれないことを、卒業論文を書きながら強く感じていたからである。先にふれたとおり、現代語の研究では、「は」の機能は「が」との比較を軸に分析されることが多い。しかし、「が」は格助詞であり、また古代語ではその用法は偏っている。古代語で「は」と対照されるべきなのは、むしろ同じ係助詞グループに属し、当時盛んに用いられていた助詞であろう。

そこで、一般に強意などとされる「ぞ」「なむ」「こそ」を一方に置きながら、「は」の検討を続けた。ここでも、現代語の「は」との違いを考えるのは楽しかったのであるが、その過程で、係り結びという現象そのものや、「ぞ」「なむ」「こそ」の差異、更には文末に現れる助詞にも興味がわいてきてしまった。係り結び構文の例を集めると、

言多く言ひなれたらむ方にぞ靡かむかし。

思ひの外に心憂くこそおはしけれな。

のように、結びに「かし」「な」などの助詞が付いた例が見られる。しかも、そこには「ぞ……かし」はあっても「なむ……かし」はないとか、「かし」や「な」は結びに付いても「かな」は付かないといった、一定の法則が見出せる。なぜだろうか。どうしても気になり、現在では終助詞グループの分析も、私の大きな課題になっている。ただ、その結果はおそらく、係助詞や係り結びの分析に、再び結びついてくるはずである。

どうにもしまらない〈私の研究〉で、やりたいことに飛びついてきた点、やはり〈私の道楽〉のタイトルがふさわしいようだが、いずれは、係助詞グループと終助詞グループの関係を視野に入れた上で、係助詞グループ・終助詞グループを体系化し、できればそれを各時代ごとに整理して、堂々と〈私の研究〉と名乗りたいと思っている。そのときが早く来るとうれしいのだが……。